

いよいよ高総体ですね。一年生はあまり出番がないかもしれませんが、雰囲気を知るだけでも収穫だと思いますよ。強い学校のプレーなどをよく見てください。

さて、以前話したパルメニデスが、「有るもの、つまり存在は、不変、不動、唯一、永遠だ」と言って「変化する世界はまやかに過ぎない」と断言したことについて、考えてみたいと思います。こういう発言は、ちょっと見ると非常識な現実を無視した考えのように見えるからです。きみたちも、「えらいけったいなことを言うとな」とか「わけが、いっちょわからん」とか思ったのではないのでしょうか。実際、パルメニデスの主張は理解されないことがあったので、その弟子のゼノンは「アキレスと亀」の例のようなかなり強引な理屈で「運動はない」というお師匠さんの主張を証明しようとしたのです。

でもパルメニデスはあたまが狂っていたのか、常識外れの妄想を言ったのかと言えば、そうではないのです。だからこそ、彼の後の哲学者たちは、変わらないものが存在して、それらが組み合わせさったり離れたりして、この変化する世界を作り上げているのだと説明しようとしたのです。

とはいえ、私たちが目にする世界は、たえず変化しているというのは「常識」ではないでしょうか。それなのに、なぜ変化しないものがあるという考えに至るのでしょうか。

この問題を考えるために、人間はどういうふうにもものを知るかを考える必要があります。実はこの問題は簡単そうに見えて、そう簡単ではないのです。「人間がものを知るのは、まず感覚を通してです」と言えば、みんなは何の疑問もなく賛成してくれると思いますが、世の中にはこれに反対する人もいます。それが、どうでもいいような人たちではなく、プラトンやデカルトなどの著名な哲学者、あるいはチョムスキーと言った現代の言語学者などもその反対者なので、これは簡単な問題ではないとわかるわけです。でもともかく人間も動物も感覚を通じて、外の世界と接触することは否定できないので、まず感覚について見ていきます。

感覚には二種類あります。つまり、外の世界と直接接している外的感覚（視覚、聴覚、嗅覚、触覚、味覚。五感とも言う）と、脳に属していて五感が受けた情報を処理する共通感覚、記憶、判断力など内的感覚です。五感の中でも最も性能のよい視覚を例に挙げましょう。ある人が一冊の本を見ているとしましょう。彼は視覚によって本の色、形、大きさなどを知ります。これらの視覚によって得たデータは、みな個別的（前回、「個別的」と「普遍的」の違いを話したことを思い出してください）です。言い換えると、この本の色、この本の形を知る。視覚（目）は、「私は本を見ている」という意識はありません。ただ、一定の形の、一定の色のある「もの」を見ているだけです。

では、どうして私たちは「本を見ている」とわかるのでしょうか。本を見ている目は、それが本だとはわからない、目がわかるのはその形や色だけです。そういう形をした、そういう色のものは「本だ」とわかるのは、感覚以外に人間には知性があるからです。

ところで、この「本」という言葉ですが、これは絵本にも辞書にも教科書にも、ありとあらゆる本に当てはまります。すなわち普遍的なものです。

ここで個別的なものと普遍的なものの違いを観察しましょう。目が見ている色や形は、その色、その形であって、他のものは別の色、別の形（たとえごく似ていても）です。つまり、世界に一つしかない（これを英語でユニーク unique という）ものです。そして、こういう視覚で捉えられるものは、みな変化しています。つまり、感覚で捉える情報は、個別的で変化するものです。



だから、確かに、人間は感覚でものを知るのですが、もしそれだけなら私たちにとって世界はたえず変化する、生成消滅するという結論になります。これに反対して、「世界は変化しない」と主張するのは、「人間は感覚と知性でものを知るのだ」と考える人たちなのです。感覚によって、この色、この形という個別的なものを知るが、「これは本だ」と知るのは知性だということです。そして、知性で捉えられた「本」って何か、考えてみてください。それは、上に言ったようにどんな実際の本にも当てはまる、そして痛んだり焼けたりしない、すなわち変化しない、でしょう。パルメニデスたちが着眼するのは、こういう知性で捉えられた世界なのです。ただ、彼は感覚で捉えられた変化する世界はまやかしたとして点で、行き過ぎました。しかし、まったくのでたらめを言っていたのではない。というより、実に深い真理を言い当てていたのです。

この人間がものを知るには、感覚と知性の二つの段階があることは、ギリシア哲学だけではなく近代の哲学でも重要な問題となります。それはまたあとで説明できたらと思います。

もう一つ、この問題に関連した、みんなも知っている問題を紹介します。それは幾何学です。幾何で言う点、線、図形などは、現実の世界には存在しません。幾何学では「点は場所を占めない。線はその点が移動して作るものだから、幅がない」というふうに設定しますが、場所を占めない点はこの現実世界には存在しません。線も同じ。また「円と直線の接点」というけれど、現実世界には円と直線が接するのは点ではなく面でしょう。みんなが作図したら、どうしても線は幅ができるし、直線が円と接するように描こうと思っても、無理です。

ではどうして、場所を占めない点ということについて話すことができるのですか。それは、ちょうどパルメニデスが言った「不変、不動、永遠の存在」と同じです。それは目に見える世界には存在しないが、頭（知性）の中には存在する。「そんな現実の世界には存在しないけど、頭の中にだけ存在するものなんて、鬼や怪獣みたいな空想の産物やんか」と言いたくなるかも知れませんが、幾何学で使う点や線は空想の産物ではない。それが証拠に、その幾何学を使って、実際に大きな建物を作ったり、土地を区切ったりすることができる、つまり現実の世界で役に立つ結果を出す。もし空想の産物だったら、現実の世界に適應できないでしょう。

では、どうして幾何学の点や線は、現実の世界に存在しないのに、現実の世界に役に立つことがあるのか。それは、それらの点や線が、現実の世界に存在するものから、知性の抽象作用（これについてはまた授業で説明します。これは非常に大切な問題です）によって、導かれるものだから、なのです。これと同じように、パルメニデスの言った不変の存在（またプラトンの言うイデアも）は、現実世界の存在を観察することによって、導き出された結論で、決して「空想の産物」として切り捨てるべきものではないのです。

このように哲学という学問は、目に見えることを観察して、そこから現実の存在の裏にある、目に見えないものを考えていこうとする学問なのです。繰り返しますが、「そんなことを知っても、自動車ができるわけでも、ロケットを飛ばせるわけでもない」と言って、哲学なんか無用だという人もありますが、みんなはどう思いますか。私は人生には有用だと思うので、この授業を進めていくわけです。

それではまた。

